

## 古代尾張の土師器 ～ 6世紀後半から11世紀の様相～

城ヶ谷 和広

## I はじめに

尾張における古代の土師器研究はほとんど空白であるといっても過言ではない。これは三重県を除く東海地方全般に該当することであるが、まとまった古代の集落遺跡の調査例が少なかったことに起因している。土師器研究の分野で早くから注目され議論が進んでいるのは古墳時代前期を中心とした時代である。また、近年、中世集落遺跡の調査が幾つも行われ<sup>1)</sup> それらの成果から中世土師器の論考<sup>2)</sup>も生まれてきた。ところが、それらをつなぐ古墳時代の後半から奈良・平安時代にかけての時代、すなわち「古代」の研究はほとんど見られないといってよい<sup>3)</sup> 当該期の発掘調査は窯跡や古墳の調査がほとんどで、その結果、須恵器・灰釉陶器の研究のみが盛んとなり、土師器の研究はほとんど省みられることはなかった。

全国的にみると、ちょうどこの時代は律令制度が整備され、統一された律令国家が生まれていく時代である。土器においても7世紀後半頃には須恵器と土師器が互換性を持ち、規格化された法量の下での器種分化を特徴とする「律令的土器様式」が成立したことが明らかにされている<sup>4)</sup> 宮都である飛鳥・藤原・平城宮では調査が進み、土師器を基本とする飛鳥、平城編年が作られ<sup>5)</sup> 他地域との比較の物差しとなっている。平安京においても土師器の細緻な編年が作られ<sup>6)</sup> 「都」の様相はかなり明確になってきている。各地においても研究は進み、特に関東などでは以前から集落遺跡の調査が多く、土師器の細かな編年も作られている。近年、北陸<sup>7)</sup>や信濃地方<sup>8)</sup>で、この方面の様相がいくつも明らかにされている。それに対して畿内と東国を結ぶ東海地方の様相はほとんどわかっていないのが実状である。

ところが、ようやく最近になって、いくつかの当該期の集落の調査が行われ、日常容器について新しい知見をえられるようになってきた。なかでも清洲城下町遺跡の下層からは6世紀から11世紀にかけて継続的な集落が見つかっている。出土土器も須恵器のみならず土師器についてもかなりの割合で出土し、おおよその変遷をたどることは可能となってきた<sup>9)</sup> そこで、十分な資料を手にはしていないが、とりあえずこれらの成果を基にして尾張とその周辺地域を含めた、いくつかの調査例を加えて6世紀後半から11世紀にかけての土師器について検討し、空白となっている「尾張古代の土師器」の変遷を少しでも明らかにしてみたいと思う。なお、6世紀後半から11世紀としたのは6世紀後半から尾張に特徴的な土師器甕が出現し、その軌跡が連続していくからであり、11世紀としたのは、とりあえず灰釉陶器の最末期〈百代寺〉様式までとするからである。

## II 集落出土の土師器の様相

近年の尾張における古代の集落の調査は土師器についてもいくつかの資料を提供している。この章ではそのなかの代表的な遺跡及び遺物について紹介することにする。

### a 清洲城下町遺跡<sup>10)</sup>

清洲城下町遺跡は西春日井郡清洲町に存する中世から近世にかけての清洲城及び城下町を中心とする遺跡であるが、その下層より6世紀後葉から12世紀にかけての集落が検出された。この集落は掘立柱建物数棟、竪穴住居70軒以上で構成される濃尾平野における平均的な集落遺跡であると考えられる。9世紀代に一時遺構がなくなるが、10世紀に再び掘立柱建物を中心とする遺構が出現する。竪穴住居などからはかなりまとまった資料が出土している。土師器についても量的に安定しており、その変遷を知る上で良好な資料が得られた。それらは遺構、遺物のあり方などから大きくA・Bの2期に分けられ、さらにA期は6小期に、B期は3小期に分けられている。なお、黒褐色砂質土層はB-2期の掘立柱建物を覆う包含層である。

### b 朝日西遺跡<sup>11)</sup>

朝日西遺跡は清洲町に存する中世を中心とする遺跡であるが、その遺構のなかに10世紀に遡る遺構群が見つかっている。10世紀後半～11世紀の集落出土の資料は余り多くなく、貴重な資料であると言えよう。

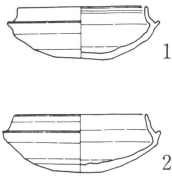
### c 名古屋城三の丸遺跡<sup>12)</sup>

名古屋城三の丸遺跡は名古屋市中区にある近世名古屋城三の丸郭内の武家屋敷を中心とする遺跡であるが、下層からは弥生時代から中世の遺構が検出された。古代の遺構は掘立柱建物5棟、竪穴住居約50棟を中心とするものであるが、出土遺物のなかに緑釉陶器及び素地ではあるが古いタイプの緑釉四足壺などが出土しており、より拠点的な集落の可能性もある。遺物は竪穴住居などから良好な一括資料も出土している。時期的には7世紀末から10世紀のもので、3期に区分されている。出土資料のなかで中心となるのはII-2期（8世紀中葉から9世紀前葉）とII-3期（9世紀中葉から10世紀）である。

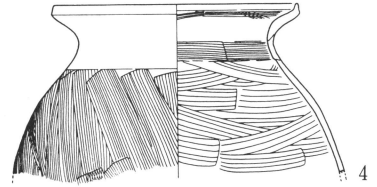
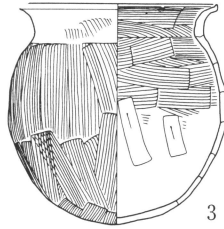
### d 大湊遺跡<sup>13)</sup>

大湊遺跡は海部郡甚目寺町にある、主として古代から中世の集落遺跡で住居はすべて掘立柱建物で構成されている。最も古いものは6世紀後葉ぐらいのものもある。愛知県下においてこの時期に掘立柱建物のみで構成される集落遺跡はほとんどない。遺物の面から見ると大湊遺跡は掘立柱建物で構成されるため、まとまった遺物は井戸出土の資料などが中心となるが、土師器は完形の甕もいくつかあり、比較的よく復元され、特に7世紀前後のものは良好な資料が多い。

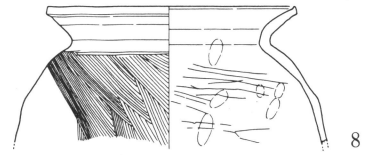
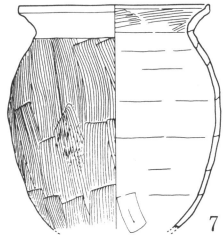
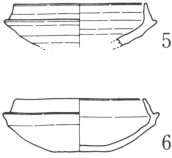
清洲城下町遺跡  
SB14



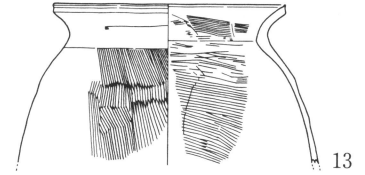
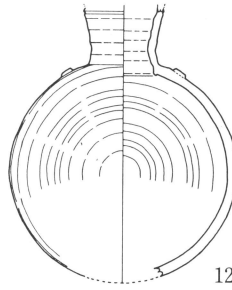
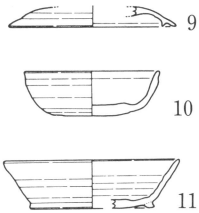
愛知県埋蔵文化財センター 年報 1991.3



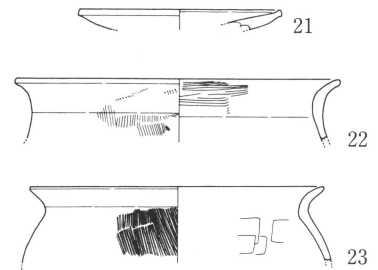
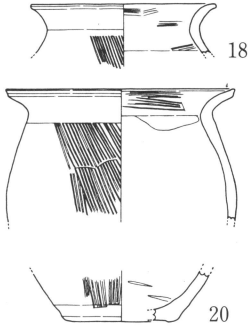
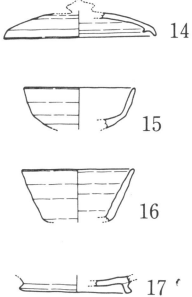
SB15



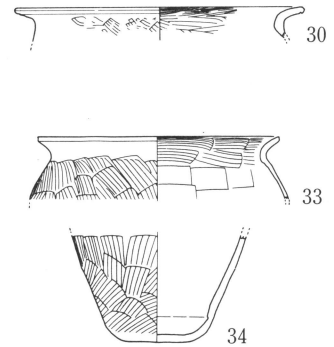
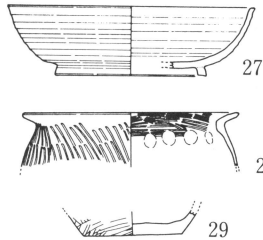
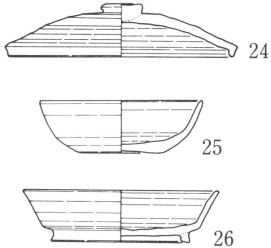
SB54



SB63



SB20



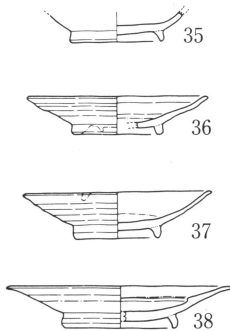
SB01



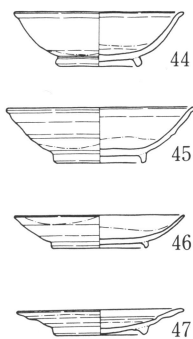
第1図 尾張の集落出土土器 (1) 清洲城下町遺跡①

清洲城下町遺跡

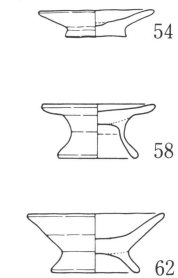
SK181



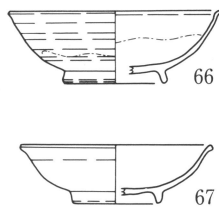
黒褐色砂質土層



p81



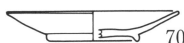
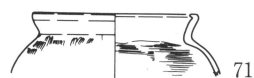
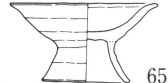
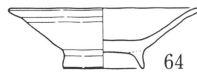
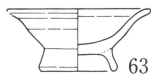
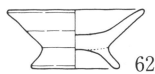
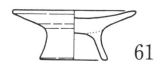
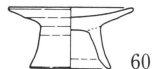
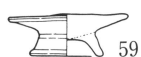
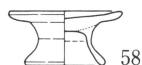
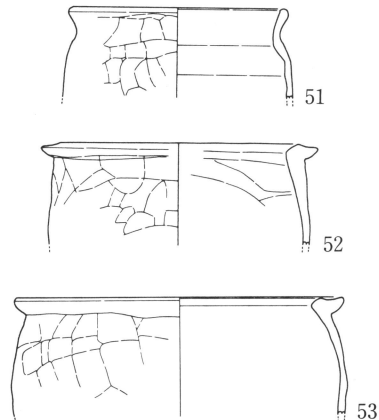
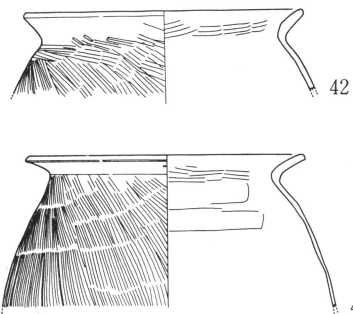
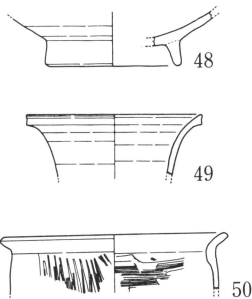
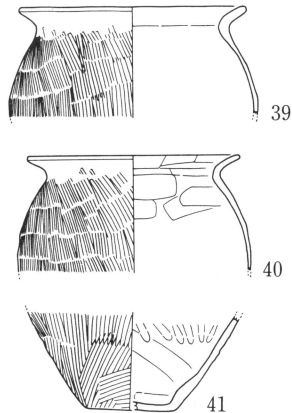
朝日西遺跡  
59E SE01



59E SK238



愛知県埋蔵文化財センター 年報 1991.3

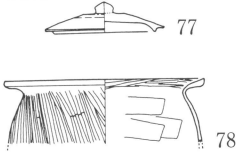


第2図 尾張の集落出土土器 (2) 清洲城下町遺跡②・朝日西遺跡 (73~76 注1文献より)

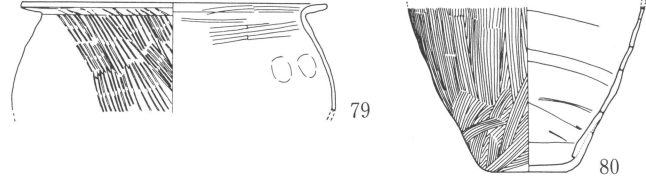


名古屋城三の丸遺跡

SB221



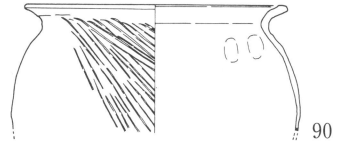
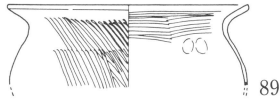
SB217



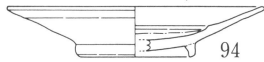
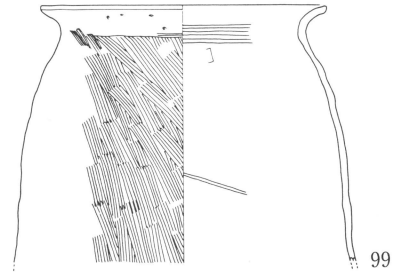
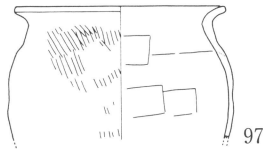
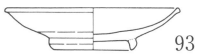
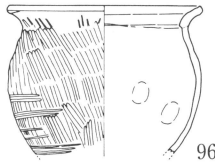
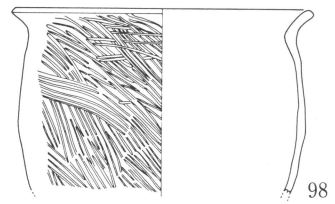
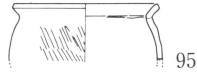
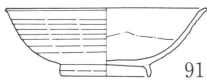
SB206



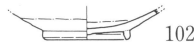
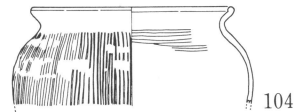
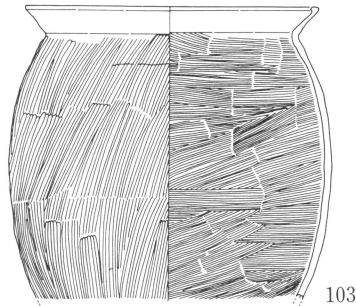
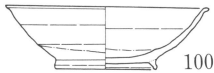
SB227



SK203

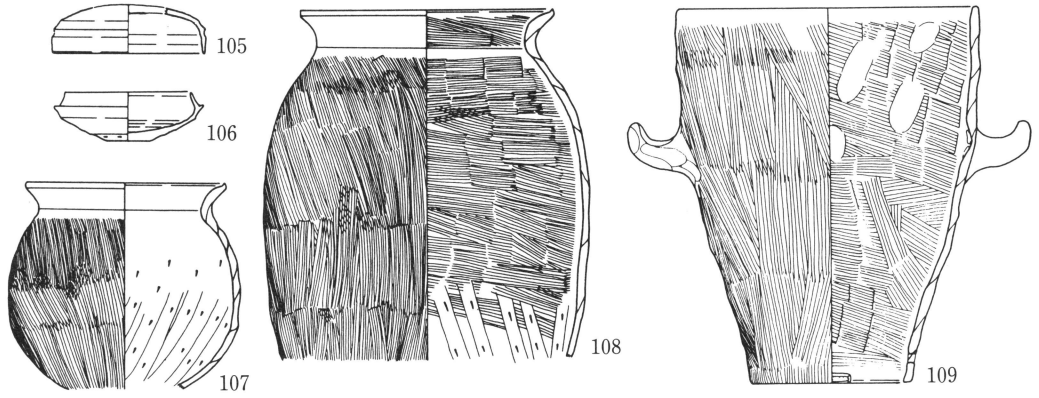


SK205

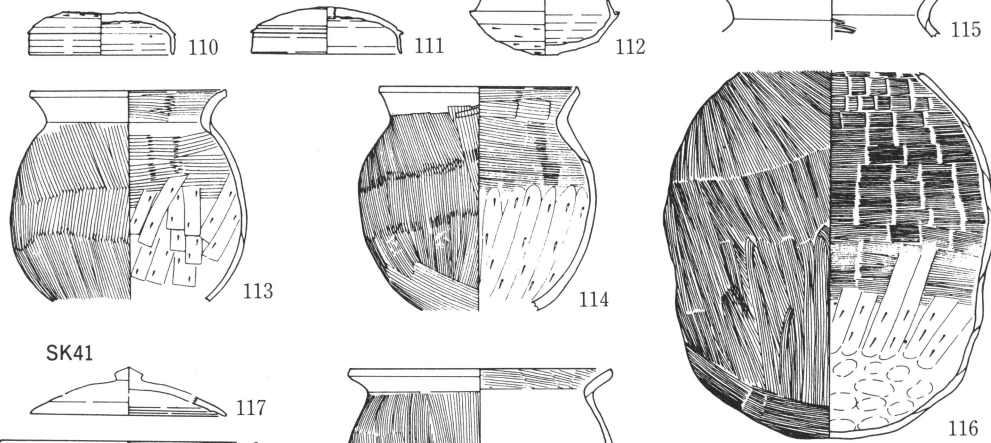


第3図 尾張の集落出土土器 (3) 名古屋城三の丸遺跡

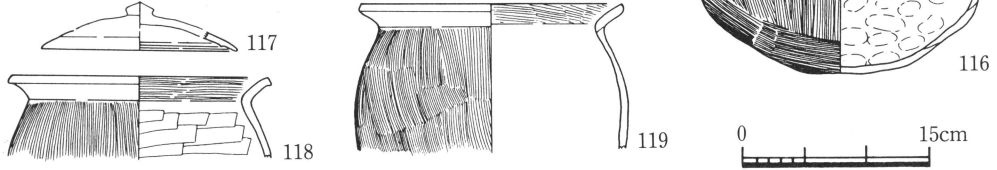
SK125



SE32

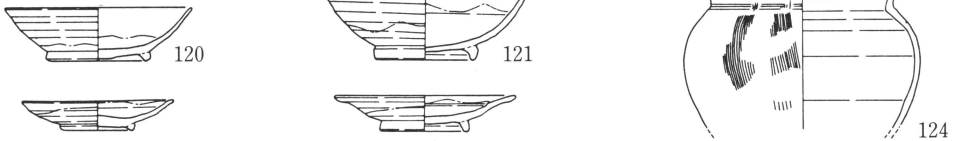


SK41

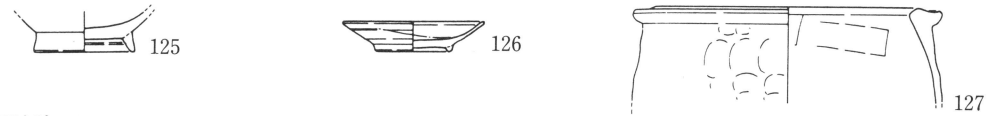


尾張国府跡

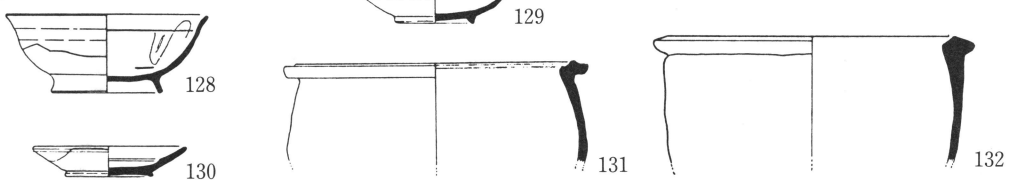
SK131



SK140



清郷遺跡



第4図 尾張の集落出土土器 (4) 大淵遺跡(注13文献より)・尾張国府跡(注14文献より)・清郷遺跡(注15文献より)

e 尾張国府跡<sup>14)</sup>

尾張の国府は稲沢市国府宮を中心とする地域が推定されているが、遺構上ではっきり建物等は見つかっていない。ただ、出土する遺物のなかには緑釉陶器や陶硯などが多数みられ、国府の存在が強く推定されているところである。遺構は奈良時代に遡るものは少なく、中心となるのは平安時代の後半である。調査は継続的に実施され、遺物も所々で検出される土坑等のなかに良好な資料がある。

f 清郷遺跡<sup>15)</sup>

清郷遺跡は一宮市に存する遺跡で昭和37年の調査で初めて古代の土師器が注目され、“清郷型”甕（鍋）が提唱された遺跡である。土師器といっしょに灰釉陶器も多数出土しており、時期的には10世紀以降に下るものであるが“清郷型”甕（鍋）はこの時代の中心的な器種となった。

### III 各時期の土師器の変遷

当該期の土師器は供膳具として杯・皿・高杯が11世紀代を中心にみられる。これらはすべてロクロを使ったもので一部は12世紀代までのこる。それ以外は全て煮炊具で、甕・鍋・甑がある。鍋・甑は少ないが、甕は全出土土器の中でもかなりの割合を占める。<sup>16)</sup>甕の形態にはバラエティーがあるが、量的にも最多く、各時期に普遍的に出土する器種としては体部が球型で小型のもの（甕A）と長胴型丸底のもの（甕B）、長胴型平底のもの（甕C）がある。そこでこれらの器種の組合せと型式変化を中心として6世紀後葉から11世紀末までをⅣ期9小期に分類し、各時期の様相を見てみる。

1) I期

I期は甕では甕A、甕Bが中心となる時期である。両者とも口縁部の形態及び技法で共通する要素が多いが、それらの変化によりI期はさらに3小期に細分される。他の器種としては甑、鍋がある。

I-1期

I-1期の資料として清洲城下町S B 14、大淵S K 125等がある。

甕Aは口径約15cmで体部がほぼ球形をなし、口縁部は強く屈曲して立ち上がる。口縁端部はシャープに上へつまみ上げる。調整は外面を縦もしくは斜め方向の細かいハケメで調整し、口縁部外面は横ナデで仕上げている。内面は基本的に細かい横ハケメで調整し、体部内面下半は縦方向のヘラズリを行う。甕Bは体部が少し長胴である以外は口縁部の形態、調整技法等は甕Aと同じである。甑は体部が逆「ハ」の字状になり2つの把手がつくもので、底部には帯状の粘土を張り付ける。調整技法は甕と同様細かいハケメ調整を用いる。鍋も口縁部の形態等は甕と共通していて2つの把手を付けている。

### I - 2 期

I - 2 期の資料として清洲城下町 S B 15、大渕 S E 32等がある。

甕 A は口縁部の屈曲がやや弱くなり、少し直線的になる。口縁端部のつまみ上げも小さくなりシャープさがなくなる。調整技法は基本的に同じであるが少し粗雑になる傾向にある。甕 B も同様の傾向にあり、体部内面のハケメ調整の代わりに指ナデ等で調整するものもある。甗は I 期と比べ大きな差はない。

### I - 3 期

I - 3 期の資料として清洲城下町 S B 54等がある。

この時期になると甕 A・甕 B は口縁部の屈曲がほとんどなくなり、直線的で、口縁部の長さも短くなる。端部のつまみ上げは短くなり痕跡程度になる。調整もさらに粗雑となる。

### 2) II 期

II 期は甕 C が中心となる時期である。口縁部の形態などから 3 小期に細分が可能である。甕 A、B も若干残るが量的には少ない。他の器種として甗があるが量的には須恵器の甗が増加してくる。甗の形態は I 期と大きな変化はない。

### II - 1 期

II - 1 期の資料としては清洲城下町 SB63、名古屋城三の丸 SB221、大渕 SK41 が挙げられる。

この時期には甕 A・B も若干残る。口縁端部のつまみ上げは痕跡を残すものも見られるが、78 のようにつまみ上げをせず、外に膨れるものもある。甕 C は II - 1 期では器壁があまり薄くなく、ハケメも比較的細かい。口縁部は緩やかに外反する。体部内面の調整は新たに横方向のヘラ削りをもちいるようになる。この時期を中心として供膳具で搬入品の暗文土師器が極少量出土する。器種は杯 A、III A、III B、椀 C、高杯などがみられる。

### II - 2 期

II - 2 期の資料として清洲城下町 S B 20、名古屋城三の丸 S B 217 等がある。

この時期になると典型的な砂粒を多く含んだ胎土で、ハケメの荒い甕 C が出現する。口縁部は短く「く」の字状に深く折り返す。体部内面はナデやヘラ削りにより非常に薄く仕上げられている。

### II - 3 期

II - 3 期の資料として清洲城下町 S B 01、名古屋城三の丸 S B 206・227 等がある。

甕 C は II - 2 期と比べると口縁部の「く」の字状の折り返しが弱くなり緩やかに立ち上がるようになる。底部も小さく丸みを持つようになる。技法的には大きな変化はない。この時期には三河地方でよくみられる口縁部を直角に折り返すハケメを持たない甕（甕 E）も少しみられる。

3) III期

3期も甕Cが中心であるが、それに加えて次のIV期に中心となる器種であるいわゆる“清郷型”と呼ばれる甕Hが出現してくる。量的にはまだ少なく普遍的な現象ではない。

III期

この時期の資料として清洲城下町S K 81、名古屋城三の丸S K 203等の資料がある。

甕Cは口縁部がやや肥厚し長さも長くなる。「く」の字状の屈曲も緩やかとなる。調整技法等については変化はない。甕Hは概ね口縁部を垂直に折り返すものがほとんどである。体部は浅く砲弾型でハケメで調整せず、ナデ・削りで調整するもので、器壁は厚味をもち、外面は全面に黒くススが付着することが多い。

4) IV期

IV期は甕Cがほとんどみられなくなる。かわって中心となるのは甕Hである。それに加えて「伊勢型鍋」と呼ばれる甕Iもみられるようになる。また特徴的なのはIV期になってロクロ土師器の供膳具がみられることである。IV期は甕Hの口縁部の形態や供膳具の有無などから2小期に細分される。

IV-1期

IV-1期の資料として朝日西59E S E 01、名古屋城三の丸S K 205、尾張国府跡S K 131等の資料がある。

甕Hが中心となるが、甕Iも量的に増加する。甕Hは口縁部の形態にバラエティーがあるが、現段階では資料的な制約から明確に変化を位置付けることはできない。およそその変化の方向としては口縁部の折り返しが鈍角的なものから鋭角的なものへ、直線的なものから屈曲したものへという変化をたどるようである。甕Iは体部が球胴型で口縁端部を折り返すもので、最も古いタイプのものである<sup>17)</sup>

IV-2期

IV-2期の資料として清洲城下町黒褐色砂質土層、朝日西遺跡59E S K 238、尾張国府跡S K 140等がある。

こほ時期は甕Hは口縁部が屈曲するものが多い。甕Iは量的にも多くなり中世には甕Hをしのいで煮炊具の中心となるものである。供膳具はIV-2期になると各地で出現し一般的な器種になってくるが、量的には多いものではなく主たる供膳具とはなり得なかったものと思われる。

5) 年代観

土師器において直接年代を示す材料は持ち合わせていない。従って、実年代は須恵器との相伴関係から推定する方法を用いざるをえない。須恵器の年代観についてはこの地域は

猿投窯編年がほぼ確立しており、実年代も付されている<sup>18)</sup>それによるとI-1期はほぼ6世紀末から7世紀初頭のH-44号窯期を含むと考えられるが、須恵器杯H（蓋杯の身）の口径がやや大きく、それより遡る6世紀後半の年代が考えられる。I-2期はこれにつづく年代で7世紀前半ぐらいの年代が考えられる。I-3期はI-17号窯期で7世紀後半代が与えられる。II期は平城I式の土師器供膳具がみられることから7世紀末から8世紀初頭が始まりとなり、II-1期は8世紀前葉、II-2期が8世紀中葉、II-3期が8世紀後葉から9世紀前葉の年代が与えられる。III期は灰釉陶器の形態などから9世紀中葉から10世紀前葉が想定される。IV期は10世紀中葉から11世紀頃にかけてである。

#### IV 尾張における土師器の特色

##### 1) 供膳具に関する問題

いま尾張における土師器の変遷をみてきたが、畿内や東国など他の地域と比較して、最も相違しているのは土師器の供膳具の欠落であろう。

尾張の場合、6世紀前半頃に土師器の椀、高杯などがみられて以来、11世紀に至るまで土師器の供膳具はほとんど「ない」といってよい。少なくとも一般的な器種として在地で生産して、供膳具に加わるということはない。尾張の食膳具は木製品を除外して考えた場合、古墳時代の終わりから古代末まで約500年間も陶器である須恵器・灰釉陶器で全てを占めてしまう。これについては三河や美濃地方でも同様なことが言える。このような現象は他の地方では全く例を知らない。西日本では須恵器生産の上昇にともない須恵器の占める割合が大きくなり、土師器の供膳具が減少する時期がある。ところがこれらは一時的なことで、8世紀後半ごろになると再び土師器は増加することになる。

この須恵器の占める割合の変化の大きな理由には窯業生産の転換の問題もあるであろう。8世紀前半頃には須恵器生産は全国的に広がり一国一窯あるいは一郡一窯といった分布となる。しかし8世紀後半には西日本ではほとんどの地域で須恵器生産が衰退する傾向にある。この背景として窯を構築して多量の燃料を必要とする生産コストの問題で説明する考え方が成り立つ。確かに大量生産・大量消費ということを考えたら肯首される見解である。しかし、このような現象を単に須恵器生産に内在する問題のみに捉らわれず、土師器自体のあり方から説明しようとする見解もある<sup>19)</sup>平城宮内では“宮外”と比べて土師器の割合が高い。これは律令的な官人制度に深く関わるものであるが、この様な土器のあり方を“宮的な”土器様相ととらえ、8世紀後半からの土師器の再進出をこの宮的な土器様相が地方にも波及した結果、須恵器の衰退、土師器の増加につながったとするものである。土師器の用途をより積極的に評価し、土器様相の変化の背景に政治的な側面を見いだそうとする見解である。

尾張の場合を見てみると土師器の供膳具はこの時期にはほとんど見られず、11世紀を待たないと出現しない。これは単に一般集落のみではなく尾張国府の調査でも同様である。

ところが注目されるのは“供膳形態がみられない”状況のなかでも若干出土する時期があるということである。それは在地産のものではなく、搬入品と考えられる土師器の一群である。これらは暗文を持つものもあり、胎土などから畿内産と思われるものである<sup>20)</sup>搬入品土師器がみられる時期は、ほぼ8世紀の前半代に限られている。このような類例はさらに増えるものと思われるが、現状では各遺跡とも出土量が数点と少ないため意味付けは難しい。いずれにしても7・8世紀という時期は律令体制の確立していった時期であり、尾張における土師器供膳具のあり方は、もう一度、律令体制における土師器のもつ意味を含めて検討してみなければならない問題であろう。

供膳具では11世紀頃になるとロクロを使った土師器が見られるようになる。このような現象は“柱状高台”を持つものなど東日本に共通する現象である。東海地方でも三重県の斎宮跡<sup>21)</sup>や岐阜県、静岡県<sup>22)</sup>でもいくつか見つかり、かなり広い地域で出現するようである。但し、尾張の場合、量的には多いものでなく、出方も特殊な出方をすることがしばしば見られる。たとえば清洲城下町遺跡<sup>23)</sup>のP81からは21点の杯・皿・高台付杯・高杯がほぼ完形で出土している<sup>24)</sup>それらには赤褐色で土師質のものと胎土が精良で白色のものがあり、ススが付いているものもある。P81はこれ以外の遺物を全く含まないことから、何等かの形の祭祀行為にともなうものと考えられる。このようなロクロを使用した土師器の一群は供膳具に残るでもなく12世紀代までで消滅してしまう。

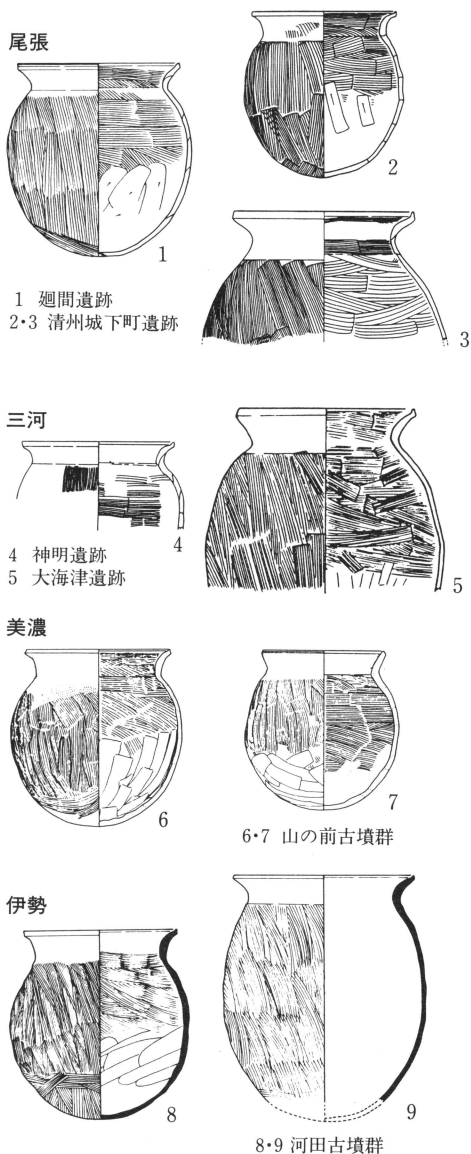
## 2) 煮炊具の変遷

煮炊具はほとんどを土師器で占める。土師器の甕は一定量、集落遺跡から出土する。最も普遍的に出土するのは、長胴甕であり、その変化もほぼつかめるようになってきた。

全国的にみてもすでに「某国型」という形で、各地で旧国単位ぐらいで甕が識別できるようになってきている。尾張の場合を見てみると、かなり特徴的な甕がみられ、「某国型」を設定できる可能性もある。

いままで土師器甕の変化を見てきたが、その変遷を概観すると尾張では大きく甕が変わる時期が4回見られる。そこで、それぞれの画期を順番に見ていくことにする。

まず、はじめはI期における口縁端部をつまみ上げる特徴的な口縁を持つ甕A・Bの出現である。この甕は口縁部の特徴以外に体部外面をたて方向の細かいハケメで調整し、内面は口縁部も含めた横方向のハケメを有し、内面下半分をたて方向のヘラケズリで調整するという特徴を持つ。なお、この口縁部の形態は鍋にも共通する。7世紀になると口縁部のつまみ上げは徐々に退化し7世紀後葉になると痕跡程度になり、細かいハケメによる調整



第5図 「東海型」甕 (S=1/8)

も粗雑化する。管見ではこのような形態のものは6世紀前半には見られなかったもので6世紀中葉以降に出現したものである。この甕がどの様にして出現したのかはまだわからないが、いま仮にこのような形態のものを「尾張型」と呼んでもよいのかも知れない。ただし、形態的によく類似した甕が伊勢・三河・美濃などにも見られる。伊勢のものはすでに「伊勢型」と呼ばれており<sup>25)</sup>さらにこれは「南勢型」と「北勢型」に分類が可能であるという<sup>26)</sup>いわゆる「北勢型」については安定したものではないため、今回は「伊勢型」として論を進めていく。「伊勢型」の特徴は河田古墳群出土遺物<sup>27)</sup>のように口縁部のつまみ上げや体部の調整技法など尾張のものと同様である。両者の違いを強いてあげれば「伊勢型」は主流を占めてはいるが「別種の甕」<sup>28)</sup>も種々存在するのに対し尾張の場合はほとんどのものがこの形をとる。形態からみれば口縁部内面の横ハケメが尾張のものはほとんどついているのに対し、「伊勢型」はないものもかなり見られるという程度

のものである。これらは例外も多々あり、形態・技法で個々に区別するのはむずかしく、積極的に「尾張型」・「伊勢型」と区分するには躊躇を感じる。いわゆる「北勢型」とされたものについては近江の影響があるらしく<sup>29)</sup>口縁部の形態は似ているが体部外面をヘラ削りしており、地域的な変容がみられるようである。また、三河の例も岡崎市神明5号住居址出土遺物<sup>30)</sup>・大海津遺跡出土遺物<sup>31)</sup>等はほぼ尾張と同じ様な形態のものである。三河ではこのタイプが中心になるのではなく、口縁部がそのまま伸びる甕など多様な甕があり、はっきりつかめない。美濃においては各務原市山の前1号墳のなかから完形でこの甕が出土している<sup>32)</sup>このような甕は宇田遺跡でも見られ<sup>33)</sup>美濃においても一般的な形態であ



ったようである。ただ、時期が7世紀に下がるが、山の前2号墳からは北勢地方にみられたような体部下半分をへら削りするものも出土している。年代についてみると伊勢、三河のものは6世紀中葉<sup>34)</sup>美濃の例は6世紀後半とされており<sup>35)</sup>伊勢・三河のものは現在・尾張で検出されているものより若干古く考えられている。しかし、尾張のものも6世紀中葉がはっきりせず、もう少し古く上がる可能性もある。このように見てくると尾張・三河・伊勢・美濃地方では6世紀後半代にきわめてよく似た形態の甕が出現していたことになる。北勢地方や美濃地方では底部をへら削りするという地域差<sup>36)</sup>もあるが、“口縁部を上につまみあげ、口縁部から体部内面を横方向のハケメで調整し、内面下半分をへら削りするようなもの”を大きく「東海型」として設定した方がよいのかもしれない。「東海型」は形態的には畿内と近く、畿内の都城遺跡でも見られることから、この地域と畿内とのつながりは深い<sup>37)</sup>と考えられる。

ところが、その後の状況は違ってくる。第2の転換期はII期の7世紀から8世紀にかけてである。II期ではそれまでの甕A・Bにかわって小平底で極めて長胴の甕Cが出現する。甕Cは口縁部を「く」の字状に折り返し、体部外面を斜めから縦方向の荒いハケメで調整し、体部内面はナデやケズリで薄い器壁に仕上げるのを特徴とする。口縁部は8世紀代には鋭角的に折り返すが9世紀代のもの折り返しは緩やかになる。甕Cの出現については甕Bの発展と考えるのか、まったく別の系譜のものとするのか、現状では結論は下し得ない。口縁部内面の横ハケメを残す点などは前代と同じであるが、底部は小平底となり、外面のハケメは荒く砂粒を多く含んでおり、器壁は極めて薄い。このような形態のものは畿内にはみられず、むしろ東の影響等を考えた方がよいのかも知れない。いま仮に、この甕を「尾張型」として設定しておきたい<sup>38)</sup>美濃においては甕A・Bの7世紀代に見られる型式変化および甕Cの出現と型式変化は尾張のそれとよくにており、両国の関係は深いといえるであろう。一方、伊勢においては技法や形態の上で大きな変化はみられず、前代からの型式発達が続き<sup>39)</sup>底部は丸底で、口縁部のつまみ上げも巻き上げのような形で残っていく。この様な「東海型」を継承した形態のものを「伊勢型」と呼ぶならば、「伊勢型」甕はずっと平安時代まで続いていき、途中で大きな転換を見せた尾張とは対照的な流れとなる。三河の場合も7世紀頃になると別の形態をとる甕となり、8世紀代には口縁部を鋭角的に折り返す、ハケメを全く持たない甕（甕E）となる。このような甕は8世紀後半頃尾張でもしばしば見られるが、きわめて特徴的で、すぐ識別は可能であり、「三河型」と呼んでもよいのかも知れない。とにかく、この時期は尾張、三河、伊勢では全く別個の「某国型」の長胴甕を生み出していく。

第3番目の画期は平安時代の前葉、9世紀頃になる。III期は甕Cに“清郷型”と呼ばれ

る甕Hが加わる時期で過渡期的な様相を持つ時期である。これまで甕Cは口縁部を若干変化させながらほぼ変わることなく続いてきたが、10世紀代には衰退する傾向にある。そのころ出現した甕Hは体部をナデやケズリで調整するものでハケメによる調整は行わない。このような特徴は「三河型」の特徴であり、口縁部の形態も「三河型」からの発展と考えた方が自然である。また、胎土分析の結果などからもこれを支持するような見解が出されている。<sup>40)</sup>甕Hは体部があまり深くなく、甕というよりはむしろ鍋に近い形態である。伊勢についても尾張と同様に10世紀頃に長胴甕がみられなくなって行き、体部が球胴型の「伊勢型鍋」へと変化していくのである。美濃についてはこれ以降調査例も余りなく、はっきりしない。

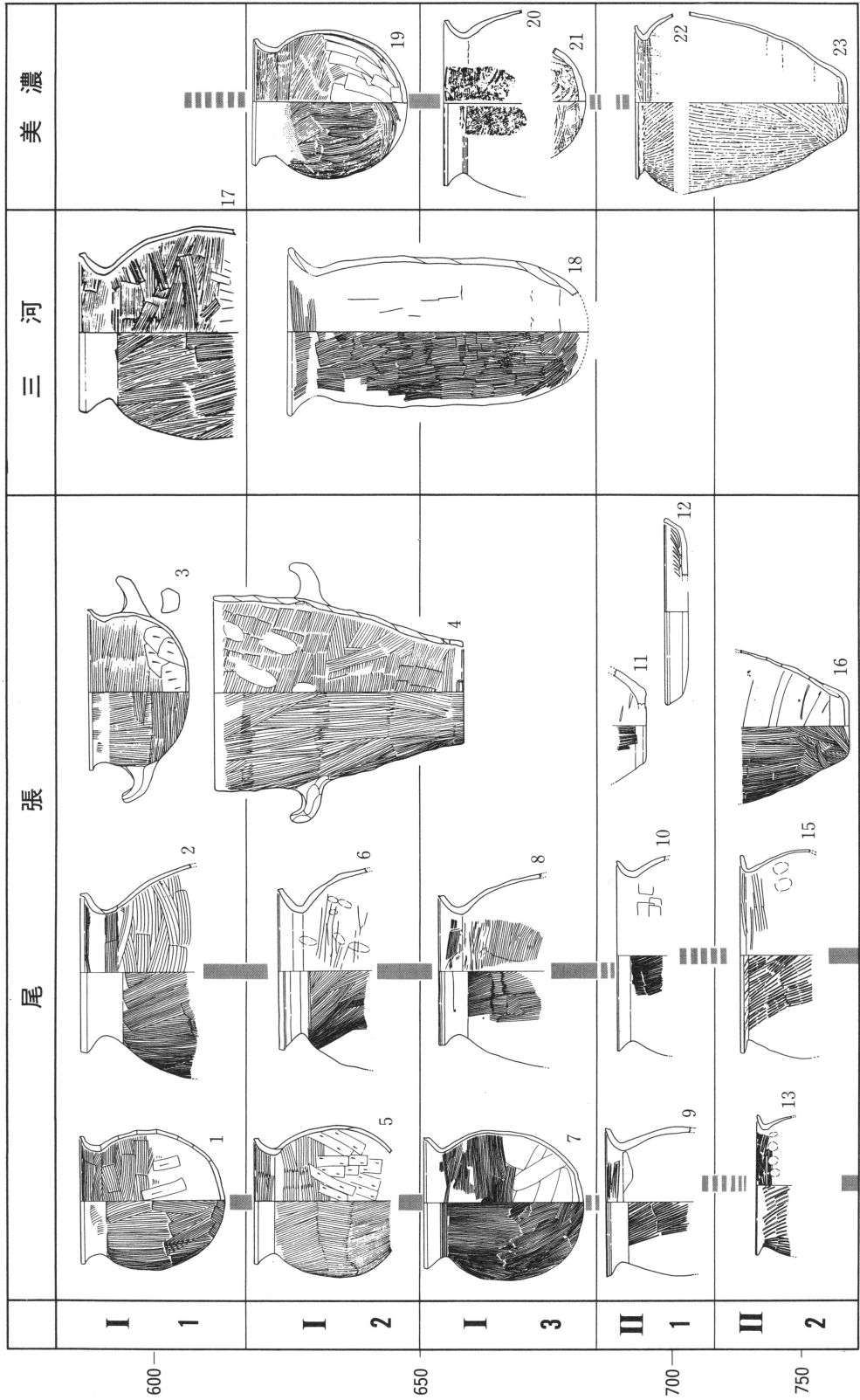
最後にⅣ期になると“長胴甕”甕Cが見られなくなり、“鍋的な”甕Hが中心となる。さらにこれに甕Iが加わる。この時期に見られる甕Iは「伊勢型鍋」と呼ばれる「伊勢型」甕を起源とする甕のうちで最も古く編年される形態である。<sup>41)</sup>甕Iは球胴形の体部と内側に折り返す口縁端部を特徴とし、体外面は荒いハケメで調整する。甕Cの消滅により、尾張では独自の形態の甕が製作されなくなり、三河地方を起源とすると思える甕Hを中心に、伊勢地方を起源とする甕Iが分布するのである。11世紀代には尾張や三河でも甕I「伊勢型鍋」の分布地域になる。甕Hは伊勢・尾張・三河・遠江と広範に分布するが、12世紀には衰退する。Ⅳ期のおわりの12世紀代では「伊勢型鍋」が主流となり、長く続いた“甕”から“鍋”へと変化してしまうのである。

## V まとめ

以上、尾張とその周辺部を含めた古代土師器の様相を見てきた。これまでは調査例がないということで当該期の土師器はほとんど省みられることはなかった。しかし、近年の古代集落の調査はようやく当該期の土師器にも光を当て始めた。

本論では尾張における古代土師器の様相をつかむためにまず、各遺跡における遺構出土資料を中心にその変遷を明らかにし、特色を抽出しようとした。その結果、6世紀後半から11世紀の間を土師器甕の組合せ及び形態から大きくⅣ時期に区分し、さらに、細かな形態の特徴から9小期に細分することができた。

また、周辺地域を含めて各時期毎に特徴的な甕の分布が変わることも看取できた。やや抽象的にまとめると次のようになる。Ⅰ期（6世紀後半から7世紀）は軽微な地域差はあるのかも知れないが東海地方西部に広く分布する共通した特徴をもつ「東海型」甕の時代といえるであろう。「東海型」甕は畿内の都城などからも出土し、畿内とのつながりも強いといえる。Ⅱ期（7世紀末から9世紀前葉）にはこの共通性が崩れ、尾張には「尾張型」甕、三河には「三河型」甕、伊勢には「伊勢型」甕というように「某国型」長胴甕の時代



S = (1/8)

第6図 土師器変遷図 (1)

	尾	張	三河	美濃
II 3	<p>24, 25, 26, 27, 28</p>	<p>29</p>	<p>39, 40, 41</p>	
III				
IV 1	<p>30, 31, 32</p>	<p>33, 34, 35, 36, 37, 38</p>	<p>42</p>	<p>43</p>
IV 2				
800				
850				
900				
950				
1000				
1050				

出典一覧  
 1・2・6～14・24・25・27・28  
 33～38…清洲城下町遺跡  
 (註10文獻)  
 39…土田遺跡 (註1文獻)  
 45…大河遺跡 (註13文獻)  
 15・16・26・31…三の丸遺跡  
 (註12文獻)  
 17…大津津遺跡 (註31小林1990)  
 18…真宮遺跡 (註30文獻)  
 19…山の前1号墳 (註32文獻)  
 20～23…重竹遺跡 (註48文獻)  
 29…福間遺跡 (註49文獻)  
 30…海郷遺跡 (註15文獻)  
 32…尾張国降跡 (註14文獻)  
 39・40…諏訪遺跡 (註50文獻)  
 41…志賀野遺跡 (註51文獻)  
 42…西前遺跡 (註52文獻)  
 43…郷中遺跡 (註53文獻)

S = (1/8)

第7図 土師器変遷図 (2)

となる。「東海型」の共通性はすでに7世紀後半には崩れており、これが何に起因するのかわかりしないが、律令体制における「国」の設置時期と近く、何等かの関係があるのかも知れない。Ⅲ期（9世紀中葉から10世紀前葉）は尾張では「尾張型」甕が中心ではあるが、三河では「三河型」甕の後えいとして甕H（鍋）が誕生しつつある。伊勢でも「伊勢型」長胴甕が衰退の傾向を示し、新しい時代の「伊勢型鍋」の祖型が形づくられる時期である。この時期は前代の「某国型」長胴甕のなかから次代の“鍋”への芽が萌え出す時期とさええる。Ⅳ期（10世紀中葉から11世紀）は各地で“長胴甕”が消滅してしまう時期である。尾張地方では独自の「尾張型」甕がなくなり、それぞれ搬入品と思われる“三河の”甕H<sup>42)</sup>と“伊勢の”甕Iが競合して存在するのである。Ⅲ期に芽生えた“鍋”が10世紀後半頃から国を越えて動き出し、11世紀代には複数の国にまたがって分布するようになる。土師器甕から見ても“中世への胎動”は始まっているのである。その後、甕I（「伊勢型鍋」）のみが残り、唯一の煮炊形態として主流となる。「伊勢型鍋」は12世紀から14世紀頃まで伊勢から尾張、三河の煮炊具のほとんどを占めてしまい、その分布は中世における広域流通“商品”として太平洋岸を中心に鎌倉まで広範な地域に及ぶ<sup>43)</sup>

見方を変えてこの変遷を遺構との関係及び用途に関して見てみると、Ⅰ期は基本的には竪穴住居でつくり付けのカマドが明瞭にみられる時期である。甕Bの胴部はやや長胴で、カマドに合わせたやや長胴の形態の甕の出現ということがいえる。ところが、Ⅱ期になるとⅠ期のようなカマドの構造物が見られなくなり、床面に焼土が散っているのみという状況や竪穴住居の一辺が少し突出し、そこに土師器甕の底部のみを伏せた状態で据えているという状況<sup>44)</sup>が見られる。土師器甕Cは胎土に砂粒を多く含む薄手のものとなり、胴部も大きな長胴となる。このような胎土や形態の変化は熱の伝導なども大きく関わってくることから、煮炊き形態に変化があったと考えられる。この地域には移動式のカマドはないが、何等かの竪穴住居の床面に接しない構造物で、しかも大きな長胴を支えるものが存在したのであろう。または住居外の炉も考えられるが、現在検出されていない。Ⅲ期は竪穴住居と掘立柱建物が両方存在する時期で、甕も“長胴型”と“鍋的な”ものが存在する。この時期から煮炊き形態も掘立柱建物に適したような、その浅い“鍋的な”甕へと変化するのかも知れない。Ⅳ期になると竪穴住居はなくなり、甕から鍋へと変化していくのである。この甕から鍋へという変化は単に形態上の問題のみならず、住生活・食生活をも含めた奥の深い問題であり、より慎重に考えなければならない問題でもある。

以上、甕を中心として見てきたが、もう一つ問題点として残るのは土師器供膳具の欠如である。これは他の地域と比較して大きく異なる点である。三河や美濃も含めた尾張周辺地域では古代の猿投窯・尾北窯・美濃須衛窯といった巨大な生産地を背景にもつ地帯の特

殊性として片付けることができるかも知れない。しかし、土師器供膳具を用いることは8世紀前半頃においては特別な意味があり、律令体制の地方の浸透とも関連付けられて考えられる要素である<sup>45)</sup>尾張における土師器の欠如と8世紀前半頃の少量の畿内産土師器の存在は改めて、律令体制における土器のあり方を考える上で参考になるであろう。同じ頃、東国では土師器の赤彩等の行為を行う。これも律令制の浸透と関連して考えられている<sup>46)</sup>また、該期は「律令的土器様式」の頂点の時代である。この概念の構成要素の一つに土師器と須恵器の互換性という考え方<sup>47)</sup>がある。この〈互換性〉という意味についてももう一度再検討してみる必要があるかも知れないが、今回は事実を指摘するにとどめる。

今まで尾張とその周辺部を含めて、土師器の変遷及び供膳具、煮炊具の特色について考えてきたが、種々の問題が残されたままになっている。時期区分やそれぞれの画期の背景などさらに検討しなければならない課題は多いが、本論はアウトラインをつかむことを主眼としていたため、それらの課題については別の機会に考えてみたいと思う。

(1990. 2. 20)

#### 謝辞

本論を成すにあたり池本正明・宇野隆夫・鈴木正貴・野末浩之・前田清彦・宮腰健司の各氏から種々の御教示を得た。末尾ながら記して謝意を表したい。

#### 註

- 1) 例えば土田遺跡(助愛知県埋蔵文化財センター1987『土田遺跡』、1991『土田遺跡II』)、阿弥陀寺遺跡(助愛知県埋蔵文化財センター1990『阿弥陀寺遺跡』)、森南遺跡(甚日寺町教育委員会1990『森南遺跡』)などがある。
- 2) 佐藤公保1986、1987「中世土師器研究ノート(Ⅰ)、(Ⅱ)」『助愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和61、62年度
- 3) わずかに器種分類を中心とした池本正明1990「土師器煮沸具について」『志貴野・小島遺跡』(助愛知県埋蔵文化財センター などが見られるのみである。
- 4) 西弘海1982「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古稀記念論文集』
- 5) 奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』、1977『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』
- 6) 宇野隆夫1981「白川北殿北辺の土器・陶磁器」『白川北殿北辺の調査』京都大学埋蔵文化財調査報告書Ⅱなど
- 7) この成果は石川考古学研究会・北陸古代土器研究会1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』等に盛り込まれている。
- 8) (助長野埋蔵文化財センター1989『吉田川西遺跡』、1990『中央道長野線関係埋蔵文化財発掘調査報告書-総論編-』
- 9) 城ヶ谷和広1990「清洲城下町遺跡下層出土土器の検討」『清洲城下町遺跡』(助愛知県埋蔵文化財センター
- 10) (助愛知県埋蔵文化財センター1990『清洲城下町遺跡』
- 11) (助愛知県教育サービスセンター1984「朝日西遺跡」、1985「朝日西遺跡Ⅱ」『年報Ⅱ、Ⅲ』
- 12) (助愛知県埋蔵文化財センター1990『名古屋城三の丸遺跡(Ⅰ)』
- 13) (助愛知県埋蔵文化財センター1991『大湖遺跡』
- 14) 稲沢市教育委員会1983『尾張国府跡発掘調査報告書(Ⅴ)』など
- 15) 一宮市史編さん室1974「清郷遺跡」『新編一宮市史資料編』四
- 16) 清洲城下町では土師器類は全体の出土量の約20%から40%を占める(註9文献)。

- 17) 新田洋1985「平安時代～中世に於ける煮沸用具－『伊勢型』鍋－に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1
- 18) 檜崎彰一、斉藤孝正1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告書』Ⅲ
- 19) 宇野隆夫1989「結び」『古代と中世の歴史と社会』
- 20) 清洲城下町遺跡のものについては奈良国立文財研究所巽淳一郎氏、玉田芳英氏、奈良県教育委員会林部均氏より御教示を得た。
- 21) 三重県斎宮跡調査事務所1985『年報1984』
- 22) (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所佐野五十三氏の御教示によると清水市でも同時期に見られるという。(清水市郷土研究会1981『静岡県清水市蘆崎遺跡発掘調査概要報告』)
- 23) 註10文献
- 24) 岐阜市教育委員会内堀信雄氏より岐阜市内でも清洲城下町遺跡の例と同様、数十点がまとまって出土しているとの御教示を得た。
- 25) 小笠原好彦1980「近畿地方7・8世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27-2
- 26) 西口寿生1983「土師器の地域色」『文化財論叢』
- 27) 多気町教育委員会1974『河田古墳群発掘調査報告』Ⅰ
- 28) 註26文献
- 29) 註26文献
- 30) 新編岡崎市史編さん委員会1989『新編岡崎市史』16
- 31) 愛知県教育委員会他1989「大海津遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』4・小林久彦1990「古墳時代後期の土師器について」『見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会
- 32) 各務原市教育委員会1990『山の前1・2号古墳発掘調査報告書』
- 33) 岐阜市教育委員会1975『宇田遺跡発掘調査報告書』
- 34) 伊勢については註26文献、三河については註31小林1990による。
- 35) 註32文献
- 36) 地域差だけでなく、さらには時間差という視点も考えられる。体部外面下半を削るものは山の前2号墳のように7世紀に下がる時期的に後出の現象かも知れない。
- 37) 註26文献
- 38) 本文中では「東海型」・「尾張型」・「三河型」などと型という言葉をよく用いたが、この型という言葉の内容は曖昧で“特徴的にみられる”といったような意味で使用している。これは畿内地方や東国地方等の他地域と比較し、この地域の土器生産をも含めた土器の総体的理解を深める意味でも、取えてその特徴的な甕を「型」として把握して、その動向を検討しようとしたからである。
- 39) 註21文献
- 40) 胎土分析の結果から、甕Hは産地として濃尾平野、西三河、静岡等が想定されている(鈴木正貴1990「土器胎土重鉍物分析報告」『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター)。型式変化がスムーズにたどれる点などを考えると産地として三河地方が有力であり、それが尾張にもたらされたものとも考えられる。
- 41) 新田洋「三重県における古代末～中世にかけての土器様相」1988『マージナル』9
- 42) 胎土分析の結果などから、全体的に三河の土器が濃尾平野地域にもたらされるという現象はみられるが、逆はほとんどないという一方通行的な土器の移動形態の存在が想定されている(池本正明1990「自然科学的分析」『志貴野・小島遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター)。このような指摘を考え合わせると初期の甕H、Ⅰはそれぞれ三河、伊勢からもたらされた可能性は高いと思われる。
- 43) 註41文献
- 44) 城ヶ谷和広1990「古代集落の展開」『名古屋城三の丸遺跡(Ⅰ)』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 45) 註19文献
- 46) 鶴間正昭1990「奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味」『古代学研究』122
- 47) 註4文献
- 48) 関市教育委員会1984『重竹遺跡』3
- 49) (財)愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』
- 50) (財)愛知県埋蔵文化財センター1989『諏訪・杉山端城遺跡』
- 51) (財)愛知県埋蔵文化財センター1990『志貴野・小島遺跡』
- 52) 一宮町教育委員会1987『西浦遺跡の調査』
- 53) 豊川市教育委員会1989『郷中・雨谷』